

復本一郎氏著

## 『俳句源流考』

——俳諧発句論の試み——

(愛媛新聞社・2000年・本体7000円)

明星大学講師 藤原 マリ子

本書は、復本一郎氏のここ十数年間における俳論研究の成果を一冊にまとめた待望の大作である。

氏は『芭蕉における「さび」の構造』(昭48年)において俳論研究の最初の成果を発表して以来、『鬼貫の「独ごと」全訳注』(昭56年)『さび—俊成より芭蕉への展開—』(昭58年)『笑いと謎—俳諧から俳句へ—』(昭59年)『本質論としての近世俳論の研究』(昭62年)『芭蕉歳時記—堅題季題はかく味わうべし—』(平9年)等と、俳諧の普遍的性質を究明する意欲作を次々と世に送りだしてきた。氏の俳論史に対するスタンスは、『本質論としての近世俳論の研究』の「まえがき」にあるように、

従来の俳諧史の研究、あるいは俳論史の研究は、流派としての俳諧の特色、時代としての俳諧の特色、地域としての俳諧の特色、そして、個々の俳人それぞれの俳諧の特色を明らかにすることに力がそそがれてきた。(略)が、私が本書で試みようとしたのは、それらいわば〈個〉の俳諧史、俳論史ではなくして、流派、時代、地域、俳人等を超えて俳論史を貫通するところのものを、「俳諧とは何か」ということを視座として探ってみようということであった。

というものであり、この姿勢は今回も変わっていない。直截に俳諧の本質に斬り込む

斬新な視点の設定の仕方とその手際に、氏の俳論史研究の特長と魅力がある。

◇

前著『本質論としての近世俳論の研究』においては、俳諧発生期から貞門・談林・蕉風を経て幕末に至る俳諧の流れが、和歌との関連において大局的に「和歌離れ」と「和歌一体化」の相剋の歴史として把握され、「俳諧とは何か」が検証されていた。

それに対して本書では、考察の対象が明治期の機一・子規らの俳論にまで拡げられ、「俳句とは何か」「俳諧の発句とは何か」の問題意識のもとに、近・現代の「俳句の源流」としての「俳諧の発句」の特質の解明に力が注がれている。

『醒醉笑』と初期俳諧の笑いの比較、『懐子』に見られるパロディーの分析、支考や子規の滑稽観の検討などは、俳諧の発句の「俳諧性」を明らかにするものである。また、句案や作意、季題と題詠をめぐっての諸論考では、「発句性」が有する特質のうち、「即興性」に照明が当てられ、発句の即興性の本質が浮き彫りにされている。

子規が「写生」を唱えて、旧派の月並俳句を糾弾したことはよく知られているが、子規の写生説の原点には、「見るに有、聞に有。作者感るや句と成る所は即俳諧の誠也」(三冊子)と唱えた芭蕉俳諧の「発句性」の重要な特質の一つが「即興感偶」を

重んじた「即興性」であり、これは連歌の発句論を継承するものであるが、貞門や談林俳諧では全く関心の埒外に置かれていたことを指摘する（「まえがきに代えて―即興の系譜―」）。すなわち、近・現代俳句と芭蕉俳諧とを繋ぐ接点を、発句の「即興性」の重視に見出しているのである。「俳諧性」と「発句性」の二つの視点を軸に紡ぎだすこうした諸考察は、発句の本質論としても、俳諧史としてもユニークで興味深く、甚だ示唆に富む。

第一部の「発句論史」にはこの他に、「皮肉骨」や「手柄」「かみ」等の俳論用語をめぐる論考や、『おくのほそ道』における「誹諧」「等窮」の表記に着目して諸本の成立や書写の問題に鋭い考察を加えた三篇の論文を含む計十九篇が収められている。

また、第二部の資料研究篇には、「資料は私蔵せず、それからが文芸の研究である」との信念に基づく、氏の架蔵本を中心とした九種の未紹介資料の翻刻と研究を収める。なかでも、他に一本の写本が存在するだけという芭蕉判の新出写本『十八番発句合』や、文政十二年写『去来抄』『故実篇』の異本の紹介は貴重なもので、今後の俳諧研究に裨益するところが大きい。巻末には周到な各種の索引も添えられ、利用の便宜が図られている。



本書の構成は以下の通りである。

【第一部】「発句論史の諸問題」

策伝作『醒醉笑』と初期俳諧／重頼編著『懐子』における六俳仙批評のパロディーの分析／季吟著『山之井』における「題目」の意味／季吟著『山之井』に見る「本意」の継承／『おくのほそ道』における表記「誹諧」に関する一考察／新出芭蕉自筆本『おくの細道』一次草稿本説／『おくのほ

そ道』の登場人物「等窮」の表記の意味するもの／俳論用語としての「手柄」の提唱／「句案」考／「蕈は山によまず」の真意／「ちる時の心やすさよけしのはな」考／蕉風俳論における「自然」観と「本情」／惟然を通して見る「かみ」の論／支考の滑稽観／蕉風伝書における「皮肉骨」についてのノート／『俳諧秘事満津毛』に見える俳諧本質論／貞門末流俳論書『誹諧秘書いしずゑ抄』の再評価／其角堂機一の俳句観／子規の滑稽観の確認

【第二部】「俳諧発句論―資料と研究―」

芭蕉判『十八番発句合』の新出写本／『去来抄』『故実』の一異本／もう一つの『去来抄』／千那伝書『鳳鳴談』の確実性／千那伝書考／『直指伝』翻刻と考察／浪化伝書『俳諧秘文抄』考／『正風発句大概』雑考／『誹諧手引種 乾』翻刻と小考



俳論史の一つ一つの流れを丹念に追いつつも、全体を大きく俯瞰して近・現代俳句との接点を探り、今日の俳句の本質をも明らかにする氏の俳論史研究には、鬼ヶ城の俳号を持ち、現代俳句にも造詣の深い氏ならではの鋭利な問題意識と洞察が生かされている。俳文学研究を志す研究者には勿論のこと、俳句に関心を持つすべての人々にぜひお読みいただきたい一書である。